



ひき岩群の自然観察路

# 田辺市の 自然観察 ガイドブック 〔2017年改訂版〕



**ひき岩**

和歌山県指定文化財（天然記念物）

## 神島

古来より海上鎮護の神が奉られ、南方熊楠が愛し、神社合祀から守った神島の森は、南紀の海岸性の暖地性植物群落の特徴をよく現しており、国の天然記念物にも指定されています。魚付林としても大切にされ、島と海が一带となった田辺湾らしい景観です。（上陸には田辺市教育委員会の許可が必要です。）



神島（国指定天然記念物）



天神崎

## 天神崎

日本におけるナショナル・トラスト運動先駆けの地。干潮時には広くて平坦な岩礁が出現し、磯遊びや自然観察には最適の場所です。

## 奇絶峡

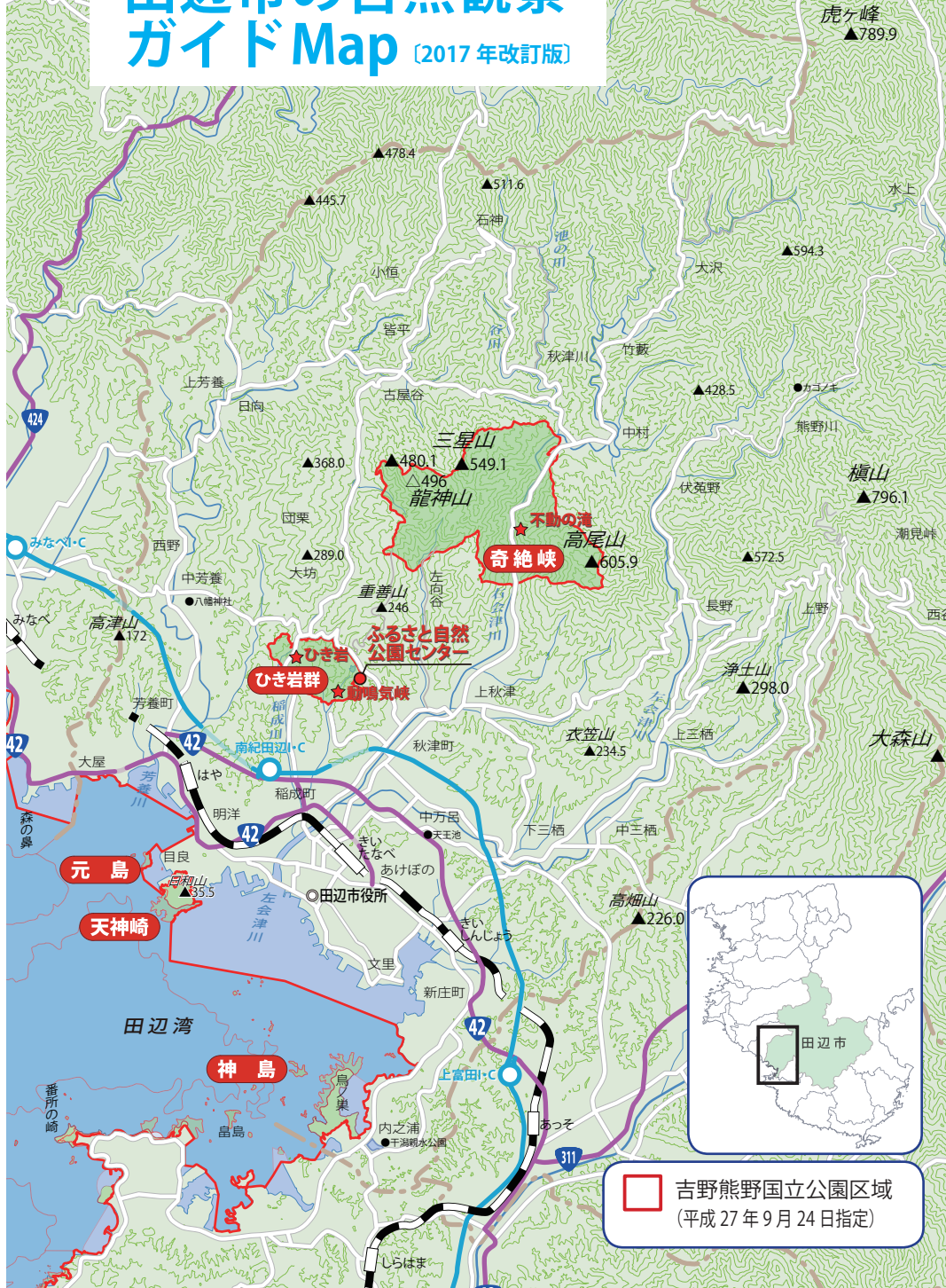
巨岩がいたるところに点在する溪谷で、溪谷をはさんで迫ってくる絶壁と、それをおおう照葉樹林がみどころです。春には新緑や桜、夏には涼しげな不動の滝、秋には紅葉と四季折々の溪谷は、観光地としても有名です。



奇絶峡



# 田辺市の自然観察 ガイドMap [2017年改訂版]



## 目 次

はじめに	1
改訂にあたって	2
1 海岸部の生きもの	3
① 岩礁の動植物	
② 海と森とのつながり	
③ 鳥類	
2 川や池の生きもの	8
① 川のような	
② 水辺の植物	
③ 水生昆虫	
④ 川や池の動物	
3 山間部の生きもの (龍神山・高尾山・檜山)	14
① 草花と樹木	
② コケ植物	
③ 昆虫やクモ類	
④ 両生類・爬虫類	
⑤ 鳥類・哺乳類	
4 源流域の生きもの	30
① 植物	
② 動物	
5 ひき岩群と奇絶峡の動植物	34
① ひき岩群	
② 奇絶峡	
6 田辺を特色づける生きもの	41
① 植物	
② 昆虫〔特に注目される昆虫〕	
7 外来動物	53
8 多様な生きものの世界	55
おわりに	57
ひき岩群国民休養地 ふるさと自然公園センター	58



田辺の山々 (鳥ノ巣半島からの眺望)



## はじめに

田辺市の自然は、<sup>のうこうち</sup>農耕地の<sup>かくだい</sup>拡大や自然林の減少によって、たしかに<sup>こう</sup>荒廃してきました。しかし、くわしく調べてみると、和歌山県下でも数少なくなってしまう重要な生きものが、まだまだ市全域のいたるところに見られます。私たちは、これらの生きものが、いつまでも田辺の市民として、共に生き続けることを願って、この小冊子をまとめました。

田辺市は紀伊半島南部の西側にあり、海が南西から陸地側に深く入り込んだ形をしています。黒潮の影響を受けて、年間の平均気温が16.7℃、<sup>すず</sup>夏涼しく冬暖かい温和な気候に恵まれています。ところが、内<sup>りゆうぜんさん</sup>陸側には<sup>みつぼしさん</sup>龍神山・<sup>たかおやま</sup>三星山・<sup>まきやま</sup>高尾山・<sup>まきやま</sup>槇山などの山々が並んでいるので、その影響もあります。雨量は海岸で1,500から2,000mm、山間部では2,000から2,500mmと多くなります。雨は梅雨期と台風時に集中する傾向がありますが、冬でも多少の雨が降り、雪はめったに降りません。

地質は全域が<sup>たいせきがん</sup>堆積岩で、海底に堆積した時代は、紀伊半島で最もおそい<sup>しんせいだい</sup>新生代第三紀にあたり、北半分は少し古い古第三紀（約5,000万年前）、南半分は新第三紀（約1,500万年前）になります。この地域には火山も<sup>かせいがん</sup>火成岩も分布していませんが、市周辺の各地に温泉があります。これは紀伊半島南東部の那智山方面に広がる火成岩（<sup>さんせい</sup>熊野酸性岩）に関係した地下の熱源によるものだと考えられています。この複雑な地形と温暖多雨という気候条件に恵まれて、昔はすばらしい暖地性の森林（<sup>しょうようじゆりん</sup>照葉樹林）が広がっていました。市内に点在していた<sup>しやじ</sup>社寺林や<sup>かしま</sup>神島にそのおもかげが残っています。特に神島は、<sup>みなかたくまぐす</sup>南方熊楠が<sup>しやじ</sup>縄文の森として後世に伝えようとしたタブノキの巨木林でした。現在では、その巨木は枯れてしまいましたが、それでも貴重な動植物が生育し、国指定の天然記念物としての価値は、全国的に高く評価されています。

## 改訂にあたって

「田辺市の自然観察ガイドブック」は、故後藤 伸先生が中心になって作成されました。作成されてから 17 年が経過したことから、今回、小規模ですが改訂を行いました。

平成 17 年（2005 年）5 月に、田辺市、大塔村、中辺路町、龍神村、本宮町が合併して、新しい田辺市となり、その市域は海岸部から奈良県との県境まで広がっています。また、平成 27 年（2015 年）に吉野熊野国立公園が拡張されたことにより、串本町からみなべ町（千里の浜）までの海岸部と「ふるさと自然公園センター」のあるひき岩群、そして、龍神山と奇絶峡が県立自然公園から国立公園へと格上げされました。

今回の改訂では、これまでの旧田辺市内の内容について、17 年の間に今はもうほとんど見られなくなった生きものや、逆にかつてはほとんど見ることができなかったが、今はたくさんいる生きものなどを見直しました。また、本文と写真の整合性を整え、いくつかの写真については、差し替え等を行いました。地図も新しいものにしました。最近話題になることが多い「外来動物」については、アライグマ、ハクビシン、ミシシippia カミミガメ、アフリカツメガエルについての説明を追加しました。

「はじめに」と「おわりに」の文書については、後藤先生の思いを大切にしたいと考え、そのまま残すことにしました。

2017 年 3 月

## 1 海岸部の生きもの



天神崎の岩礁

### ① がんしょう 岩礁の動植物

広大な岩礁の周辺で、暖流黒潮に運ばれてきた多くの熱帯系の動植物、それら海の生物を育む海岸の森林。これらがこじんまりとまとまっている地域が、ここ田辺の天神崎・元島周辺に残されているのです。和歌山県下でも数少ない海岸です。この平坦で広い岩礁はしんせいだい新生代新第三紀の水平な地層で、比較的にもろく長い年月の間に波によって形づくられた自然の彫刻です。

天神崎から元島にかけて広がる岩礁は、一見単調に見えても実はたいへん複雑で変化に富んでいます。岩礁の大部分が大潮の満潮時には、すっかり水面下にかくれてしまうのですが、干潮時にはその全域が水面から姿を現します。その現れ方は潮位によって日々変わります。岩礁の先端部では、いつも外洋と接して荒波に洗われていますが、陸地側では波も静かな入り江が深く入り込んで、先端部とは違った生きものの世界がくりひろげられています。



ウミトラノオやアオサ

干潮時に現れる岩礁の上には、さま



さまざまな生きものが見られます。特に先端部では、冬には海藻のウミトラノオやヒジキが、まるでじゅうたんを敷いたように広がります。ウニが岩礁に穴をほり、その穴にムラサキウニや熱帯系のナガウニ類が住みつき「ウニのアパート」と呼ばれています。また、そこには美しいタカラガイ類も見られます。岩上に密生した各種フジツボ類、岩礁のすき間に密集しているカメノテやムラサキウニなどの大群は、ここ天神崎ならではの景観です。

早春のタイドプール（潮だまり）には多くの小魚やウミウシ、アメフラシ、タツナミガイなどの仲間が見られ、熱帯系の真っ黒で大きなニセクロナマコも目立ちます。黒潮の影響を受けてサンゴ類も生息しています。



ヒジキ



ナガウニ



カメノテ



タツナミガイ



ニセクロナマコ

## ② 海と森とのつながり

この岩礁や波静かな入り江に、たくさんの生きものが生活しているのは次のような仕組みからだといわれています。

陸地に近い海岸には山側から海の植物（海藻やケイ藻など）が成長するのに必要な物質が流れ込んできます。海岸に深い森があると、その量がちょうどいい程度にいつも流れてくることになります。その植物たちが稚魚の餌になるので、魚たちが産卵にきます。群れる小魚たちは、この安全で食べ物の多い岩礁地帯や入り江で成長し、沖合に出て大きくなります。また、岩礁に付着している多くの動物たちの中には、幼生時代は沖合でプランクトン（浮遊生物）として過ごし、餌の多い岩礁地帯に帰ってきて生活しているものもたくさんあります。このように陸地の森と海岸の浅瀬と沖合の海は、生きものを通してしっかり結びついているのです。

昔から日本人は海の生物を大切にするためには、陸地に森林を育てなければならぬと考えてきました。海岸の森を魚付林<sup>うおつきりん</sup>と呼び、その森を保全する制度として魚付保安林があります。

田辺付近でもっともすぐれた魚付林は、天神崎の近くにつながる元島の森と湾内に浮かぶ神島<sup>かしま</sup>の森です。二つの島の森は、昔から漁業の守り神として大切に残してきましたから、今も昔の姿に近い照葉樹林でおおわれているのです。



元島の魚付林

### ③ 鳥類

この地域は野鳥の観察にも適した地域です。コースにはいくつか考えられますが、次の3つが手頃です。

- (1) 元島に通じている防潮堤を渡り元島から岩礁の先端までのコース
- (2) 天神崎の岩礁地帯から岩礁の先端までのコース
- (3) 天神崎の湿地付近の地点から丘陵地<sup>きゅうりょうち</sup>を経て日<sup>ひ</sup>和<sup>より</sup>山<sup>やま</sup>へのコース





(1)と(2)のコースでは、シギ、チドリ、カモメ、アジサシなど、海辺の鳥類が多く観察できます。特に岩礁ではメダイチドリ、トウネン、ハマシギ、チュウシャクシギなどが見られ、運が良ければ海水を飲みにきたアオバトを見ることもあります。また、ミサゴが魚を求めて飛来する、ハヤブサが渡りの小鳥の群を狙っている、などのシャッターチャンスも、それほど珍しいことではありません。冬から春、田辺湾内に群れるカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ウミネコなど多くのカモメ類や、ウミウ、カワウなどがあり、海の荒れた日には左会津川の河口付近に集結します。



メダイチドリ



ミサゴ



ユリカモメ



ウミネコ



オオセグロカモメ



カワウの親子

## 2 川や池の生きもの

### ① 川のようにす

田辺市内を流れる左会津川水系は、長さといい規模といい、自然観察に手頃な川です。ところが、近年拡大された植林や果樹園の開発によって、水量が不安定になって土砂が流入したり、農薬や家庭排水の増加や泥土<sup>でいど</sup>の堆積<sup>たいせき</sup>が続きました。そのため川原にツルヨシが密生し、セイタカアワダチソウ、オオブタクサなどの帰化植物<sup>きか</sup>がたくさん侵入してきました。また、最近は高速道路の南進にともなってオオキンケイギク、ナルトサワギクなどが目立つようになってきました。さらに、アユなど清流の魚類のいたところに、多量のニシキゴイやブラックバスを放流したため、中流から河口までの生物相<sup>せいぶつそう</sup>は大きく変化しましたし、在来種の生育数も著しく減少しました。しかし、上流域から源流域にかけては、高尾山や槇山などの山々の間を流れ下るので、多少の土砂堆積は見られるものの、生育する生物相には大きな変化がなく、自然観察に好適な地点がたくさんあります。



芳養川の上流



左会津川（上三栖）



左会津川（秋津町）

## ② 水辺の植物

川の周辺に見られる樹木で代表的なものは、ハンノキやヤナギなどの仲間です。ハンノキはまっすぐ伸びる木ですが、カワラハンノキは溪流の岸辺に生える低木です。昔は左会津川水系の中流域まで生えていたようですが、最近では上流部だけにしか見られません。ヤナギ類で多い木はネコヤナギです。早春に綿毛の花をつけることでよく知られています。このネコヤナギとその根ぎわに生えるセキショウとは、安定した川岸に多く見られた植物でした。その他に中流域にはアカメヤナギ、カワヤナギ、ジャヤナギなど、背の高い木もいくつかあります。これらも水辺環境の保全と景観保持に重要な植物群落だと考えられます。

かつては田辺市内にも多数のため池があって、多くの特有の動植物に恵まれていたことを、南方熊楠らが記録しています。特に天王池や新庄の池などには、ジュンサイ、ミスミイ、タヌキモなど、珍しい植物が密生<sup>みっせい</sup>していたそうです。ところが、農業形態の変化から、多くのため池は



左会津川（伏菟野）



カワラハンノキ



ネコヤナギ



次々に埋め立てられ、残りの池も汚濁<sup>おだく</sup>が進行して、植物の生えていない池に変わってしまいました。エビモ、ヒメビシなどもほとんど見られなくなりました。そんな中でも、わずかに昔の面影を残しているところがありますから、特に大切に保全していきたいものです。



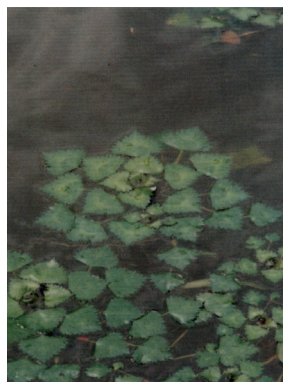
セキショウ



ミスマイとタヌキモ



エビモ



ヒメビシ

### ③ すいせいこんちゅう 水生昆虫

水辺はトンボや水生昆虫のすみ家です。昔は水田から発生するハラビロトンボやカトリヤンマ、ギンヤンマなどが多数いたのですが、最近ではあまり見られません。それに代わって、ミルンヤンマ、コシボソヤンマ、ヤブヤンマなどのヤンマ類やコヤマトンボ、オオシオカラトンボ、シオカラトンボ、コシアキトンボなどが、普通種として観察できます。

市街地周辺には特に大きな湿地しっちはありませんが、湿地で発生するサラサヤンマやヒメアカネなどが、天神崎をはじめ各地で確認されています。

農薬の流入しない池や水田にはマツモムシやゲンゴロウ類、それにアメンボやミズスマシの仲間が見られます。これらの昆虫の泳ぎ方や餌との捕り方などは、いくら見ても見あきないものです。

また、左会津川水系の支流や源流部では生きている化石として有名なムカシトンボ、ムカシヤンマや変わった形の巣を作るカタツムリトビケラなどが、他の地域より多く生息しています。



ハラビロトンボ



シオカラトンボの産卵



コシアキトンボ



ムカシヤンマ

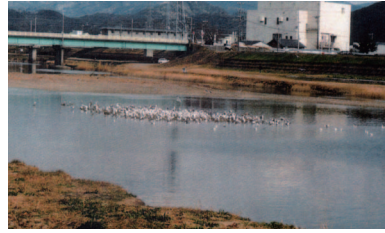


カタツムリトビケラ

#### ④ 川や池の動物

左会津川水系ではカワムツ、アユ、ヨシノボリ、ウナギなどが、上流域にはアマゴ、タカハヤなどの魚類が見られます。また1998年、熱帯系の珍しいオオウナギも遡上<sup>そしょう</sup>していることが確認されました。魚類以外でも昔に比べて少なくなりましたが、モクズガニやテナガエビも見られます。

川や池の水辺には野鳥がいつも訪れます。美しい姿のカワセミ、水辺で尻尾<sup>しっぽ</sup>を振りながら歩きまわるセキレイの仲間、溪流に潜るカワガラスなど、いろいろです。山間部にはヤマセミもいたのですが、近年になって姿を見かけません。



左会津川の河口



オオヨシノボリ



モクズガニ



ヒラテテナガエビ



ヤマセミ



水辺の動物の代表者は、何と言ってもカエルの仲間（両生類）です。昭和30年ころまでは、トノサマガエル、ツチガエル、アカガエルのなかまなどが、水田や池の周辺には無数にすんでいました。

ところが農薬（殺虫剤や除草剤など）のために、一時は激減しました。また、カエル類や昆虫類を食べていたヘビやトカゲもほとんど見られない時期もありました。最近では農薬の規制もきびしくなってきたため、ヌマガエル、アマガエル、ヤマアカガエル、イモリなどの回復傾向が見られ、少しずつ増加しているようです。しかし、左会津川水系や主な池などには、外来種であるウシガエル（食用蛙<sup>がえる</sup>）、放流したブラックバスなどが繁殖して、他の動物の回復の妨げになっている点も見逃せません。



ヌマガエル



アマガエル



ウシガエル

### 3 山間部の生きもの（龍神山・高尾山・槇山）

龍神山・高尾山・槇山など 500 から 700 m の山々が東西方向に連なり、北の方で虎ヶ峰とらがみねから果無山脈はてなしに続いています。森林の大部分はウバメガシぼうがりん萌芽林ですが、その中に内陸に生えるアカガシ林やウラジロガシ林などの常緑カシ林じょうりよくや、コジイ林・スタジイ林などのシイ林やタブノキ林が混生しています。また、この森林内にはタイミンタチバナ、トキワガキ、ミミズバイ、カンザプロウノキ、バクチノキ、イスノキ、カクレミノなど、多くの暖地性植物が生育して、紀南特有の“熊野の森”を形づくっています。山の中腹以下が開発されて果樹園になっているので、農薬汚染により昆虫などが少なくなっている地域もあります。それでも和歌山県下では、貴重な種とみなされる動植物のすぐれた観察地です。その特色や見どころを紹介します。



ウバメガシ



コジイ林

#### ① 草花と樹木

##### 《春を待つ花》

まだ寒さのぬけない梅の香る時期、畑の草地では、タンポポ、ハコベ、ハハコグサ、ナズナ、ハルノノゲシなどの草花が、早くから咲いています。



タンポポ

朝夕霧のかかる谷間の片隅に純白

の花をつけるバイカオウレン、その周辺で白い小花をつけるセントウソウ、山すその畦の草むらにそっと顔をのぞかせるアマナ、面白い模様のまるい葉をつけ、その根元に花を咲かせるアツミカンアオイ、花ではなく胞子<sup>ほうし</sup>のかたまり<sup>かたまり</sup>をつけるオオハナワラビ、京阪神より一ヶ月以上も早くからこのように可憐な花を見ることができます。



ハハコグサ



バイカオウレン



アマナ



アツミカンアオイ



オオハナワラビ



## 《春の山の花》

山道の春は、アセビの白い花やヒカゲツツジの黄緑の花で始まります。

ヒカゲツツジは他の地方では少なくとも標高 700 m 以上でないと見られないのに、ここではどういうわけか、数十メートルの山すそから、ごく普通に見ることができます。

紀南地方にもっとも多いモチツツジは、乾燥した尾根部や岩場に生えています。花期が定まらずに一年中少しずつ花をつけていますが、やはり春がもっとも多く、いたるところで桃色の大きな花を誇っています。この花のガクや新芽には“とりもち”のような粘液が出ていたため、そこに小さな虫がたくさんついて死んでいます。

ツバキやスミレも春の花ですが、田辺ではよく真冬から咲きます。よく見られるスミレは、タチツボスミレ、コスミレ、スミレ、シハイスミレ、ツボスミレなどで、よい香りのするニオイタチツボスミレも見られます。



ヒカゲツツジ



モチツツジとナガサキアゲハ



ツバキ



タチツボスミレ

## 《初夏の花》

ヤマザクラの花が散ると、山一面に密生しているシイやウバメガシ、アラカシ、ウラジロガシなどのカシ類が一斉に花をつけます。

山道付近にはオンツツジ、コバノミツバツツジが、カマツカ、コバノガマズミ、ネジキなどの木には小さな白い花が一斉に咲きはじめます。卵の花と呼ばれるウツギ、葉がまるいマルバウツギ、糊のりの木と呼ばれるノリウツギなどは、よく目立つ存在です。これらの花には多くの昆虫たちも集まります。



オンツツジ



ノリウツギ



カマツカ

## 《夏の花》

夏は花の少ない時期です。それでも、林緑の草地では、長くはびこるセンニンソウやボタンヅルなどが一面に白い花をつけます。また、キイセンニンソウという紀伊の地名がついた植物も、同じような白い花を咲かせています。



キイセンニンソウ



ボタンヅル

## 《秋に咲く花》

秋はキクのシーズンです。ノコンギク、シラヤマギク、イナカギク、アキノノゲシ、ヤマニガナ、ムラサキニガナ、ヤクシソウ、リュウノウギクなど、多くの花が山道で見られます。今では少なくなったオミナエシやリンドウも見られます。カシ類では珍しく秋に花を咲かせるシリブカガシやススキに寄生するナンバンギセルなど、秋はいつも何かの花に出会うことができるので楽しいです。また、常緑樹のリンボクやバクチノキの枝に白い穂のような花がつくのも、秋の照葉樹林ならではの景観です。



オミナエシ



シリブカガシ



ナンバンギセル



バクチノキ (幹)



バクチノキ (花)



## ② コケ植物

コケ植物は、他の植物に比べるとなじみのうすい小さな植物ですが、ルーペや顕微鏡を使って観察すると、いろんな形や色をもつ美しい植物たちです。

大きく<sup>せんるい</sup>蘚類、<sup>たいるい</sup>苔類、ツノゴケ類の3つのグループに分けられます。

私たちが普段目にしていてる緑色の部分がコケ植物の体で、その上に子孫を殖やすための<sup>ほうし</sup>胞子体<sup>たい</sup>をつけている時期もあります。コケの花と言われることもあります。蘚類は比較的長い期間、苔類やツノゴケ類は短い期間しかつけていません。

コケ植物は、塩分の濃い所を除き地球のあらゆる場所に生育しています。地上、岩上、樹上、水中など熱帯から高山まで、世界で2万種ほど、日本でその約10分の1が生育しています。

紀伊半島でも南部は雨が多く、温暖でコケ植物は豊富なところ。海岸よりも内陸部の湿度の高い溪流へいくと、多様なコケ植物がいろんな所に生えています。野外では見過ごされたり、踏みつけられたりしている小さな植物ですが、手にとりルーペでじっくり観察すると、思わぬ世界が広がります。

ここでは、山間部で見られるコケ植物のいくつかを紹介しましょう。種によって、様々な大きさがあり色も違ってきます。また生え方も異なっていますので、注意すると野外でも次第にその違いがわかってくると思います。

ほとんどは常緑ですので年中観察することができます。中でも大形の種もあり種類も多く、量的にも多い蘚類の方が苔類やツノゴケ類よりも目につきやすいでしょう。

**オオウロコゴケ（苔類）**：地上や土のたまった岩に生えます。苔類としては大きな方ですが、あまり目立ちません。



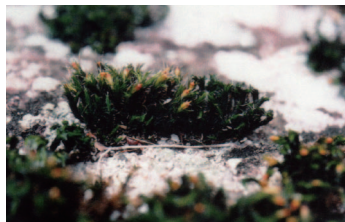
オオウロコゴケ

**オオシラガゴケ（蘚類）**：乾燥した地上や岩上に生え、大形で白っぽくすぐに目につきます。



オオシラガゴケ

**ギボウシゴケ（蘚類）**：溪流でも日の当たる岩場に生え、黒っぽい緑色の塊になって見えます。



ギボウシゴケ

**クシノハゴケ（蘚類）**：岩上や地上、木の根元などに生え、乾燥しても葉は茎にくっつくことはなく、ひろがったままです。写真には茶色の胞子体が見えています。



クシノハゴケ

**ケゼニゴケ（苔類）**：湿った地上や岩上に生える大形のゴケです。ゼニゴケの仲間で、平たい葉の上にクモの巣のような毛が生えているので野外でもすぐにわかります。



ケゼニゴケ

**トヤマシノブゴケ (蘚類)**：溪流の岩上に生育、シダ植物のシノブに似ています。

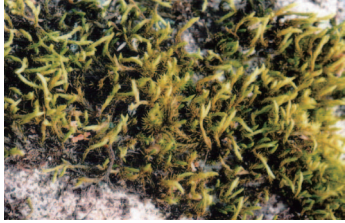
**ナガエノスナゴケ (蘚類)**：乾燥した岩上に生え、水分を吸うと葉がひろがるので、写真とは全く異なる形になります。

**ナガサキツノゴケ (ツノゴケ類)**：湿った地上や岩上に生えます。角のような胞子体をつけ、熟すると先端から二つに裂け、ねじれながら胞子を飛ばします。

**ナガサキホウオウゴケ (蘚類)**：常に水が滴る岩上に生えます。少し大形のホウオウゴケも見られます。



トヤマシノブゴケ



ナガエノスナゴケ



ナガサキツノゴケ



ナガサキホウオウゴケ

### ③ 昆虫やクモ類

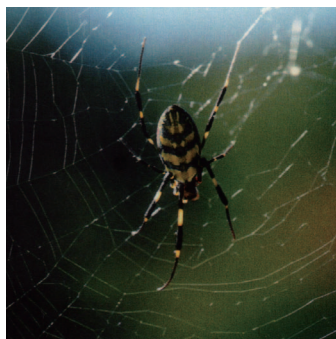
田辺の山々は、昆虫やクモ類など小さな動物たちを観察するには手頃な環境です。深い森林は少ないものの、自然林が広く残っていて、観察には都合がよいのです。しかし、紀南地方の昆虫は熊野の自然の豊かさを反映しているだけに、簡単な図鑑などによっていない種類が多いのです。時間をかけて慎重に調べてください。昆虫など小さな動物を調べるには、採集して標本を作り、くわしく調べることも大切です。ふるさと自然公園センターなどの標本も参考にしてください。

採集にはネットで捕るだけでなく、枝や葉を叩いて白い布に落とすとか、餌をしかけて集めるなど、いろいろな方法があります。もっとも大切なことは自然の中で、どんな小さな虫でも、自分で見つけて、その生活をよく観察することです。

山道でまず目につくのはクモ類で、顔に網がかかったり、枝葉の上に白い糸で網を張っているからです。初夏に見られる黒と黄色の横じま模様のクモはコガネグモです。秋によく見られるジョロウグモとよく混合されますが、現れる時期もその姿も、かなり違います。大きいドーム状の網を張るスズミグモは、紀南地方ではかなり普通に見かける熱帯系のクモです。道端の茂みの上に膜状まくじょうの網をつくり、その奥に糸でトンネルをつくっているのはクサグモです。ほかにもカゴ状の網を張るヒメグモ類、シートや皿形の網をつくるサラグモ類など、網の形にはクモのグループによって特徴があります。



コガネグモ



ジョロウグモ



網を張らないクモもたくさんいます。ハエトリグモ類は草の上で餌を探して歩き回っています。ワカバグモやハナグモは、葉の先でじっと待ち伏せをします。



ワカバグモ

#### ④ 両生類・爬虫類 はちゆう

山間部にすむ両生類や爬虫類には次のようなものがあります。

**コガタブチサンショウウオ**：森林の落ち葉の下にすみ、春に源流域の小さな流れに産卵し、そこで幼生が育ちます。



コガタブチサンショウウオ

**タゴガエル**：森林にすみ、春早く溪流沿いの岩穴から、独特の鳴き声が響くように聞こえてきます。



タゴガエル

**ヤマアカガエル**：1月から2月の寒い時期に水田跡などの浅い水たまりに卵塊らんかいを産みます。



ヤマアカガエル

**シュレーゲルアオガエル**：緑色の美しいカエルで、4月ごろ水田の畦に穴をつくって泡状のような白い卵塊を産みません。



シュレーゲルアオガエル

**タカチホヘビ**：朽ち木の中などのミミズを食べます。

**シロマダラ**：昼間はなかなか見つかりませんが、時には物陰にひそんでいるのを見かけることもあります。

**ヤマカガシ**：山でも水田でもよく見かけるヘビで、のどのところは黄色くなっています。このヘビの奥歯には毒があり、また、首を強く押すと皮膚から毒液が出ますから注意してください。

**マムシ**：猛毒のヘビとして有名で、卵で産まずに子供を産むヘビです。

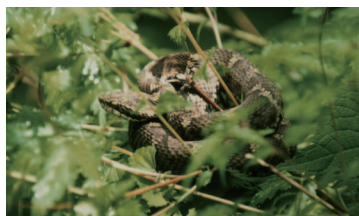
この他にヒバカリ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、カナヘビ、クサガメ、ニホンイシガメなども見られます。



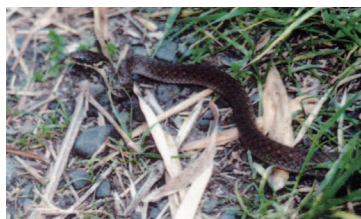
シロマダラ



ヤマカガシ



マムシ



ヒバカリ



カナヘビ



クサガメ



ニホンイシガメ

## ⑤ 鳥類・哺乳類 ほにゅう

田辺では野鳥の観察は冬の方が適しています。暖かい紀南地方は、鳥の冬越しに条件が整っているからでしょう。照葉樹林の多い地域では、この傾向が一般的であると考えてください。しかし、山間部では春からえいそう営巣して繁殖する野鳥もかなりいるため、この地域は年間を通じて、比較的多くの種類を観察することができます。

春から夏に普通に見られるのは、ウグイス、ヒガラ、ヤマガラ、エナガ、ホオジロ、モズ、キジバト、ヤマドリなどのりゅうちょう留鳥と、センダイムシクイ、ホトトギス、サシバ、ツバメ、アマツバメなどの夏鳥です。コジュケイは外来種ですが、みかんや梅の畑に住み春と秋に「チョットコイ」と鳴いています。冬鳥のルリビタキやシロハラ、アオジなどは北へ帰る前に美声を聞かせてくれます。



ウグイス



ヒガラ

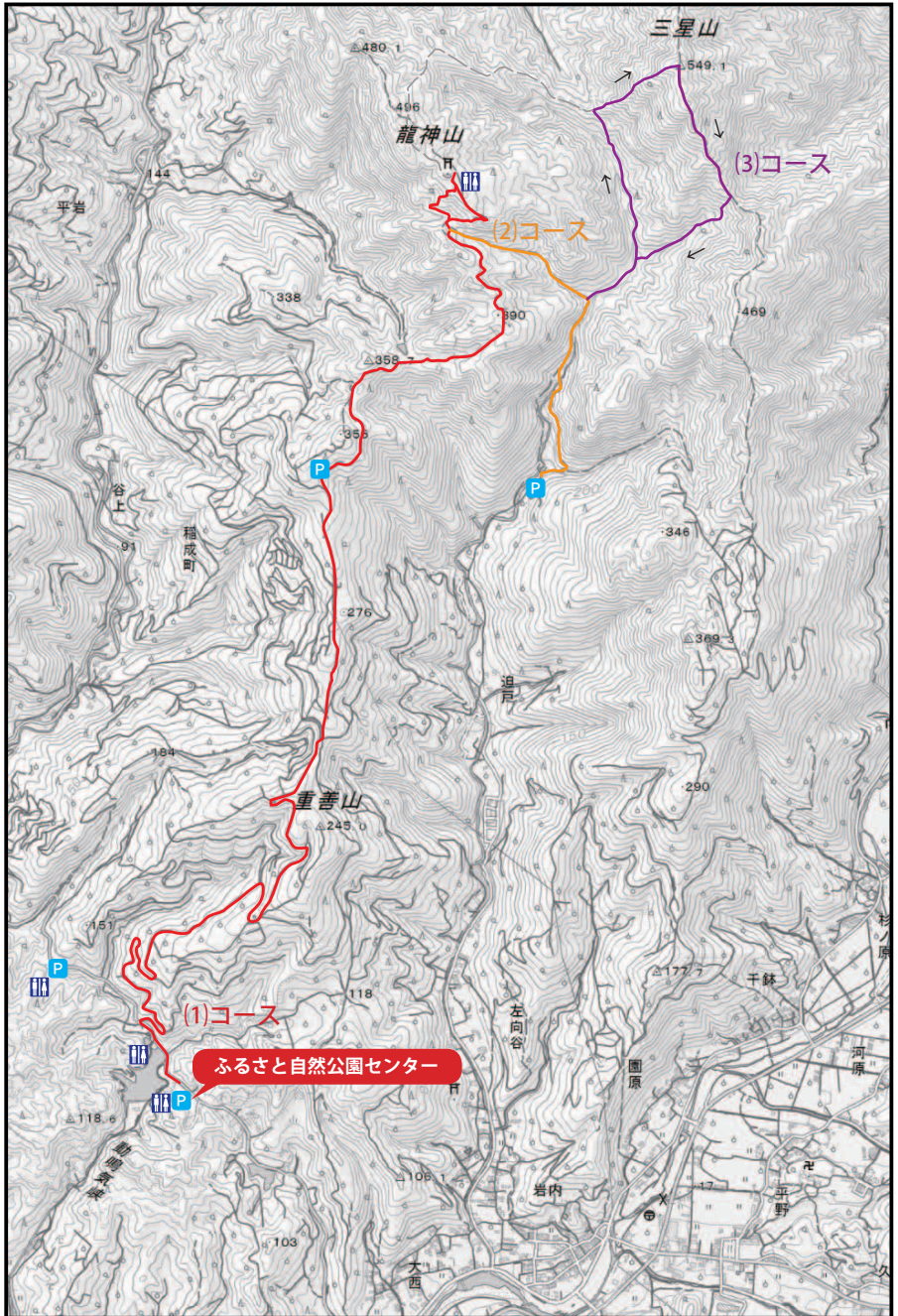


ヤマドリ

### 《観察コース》

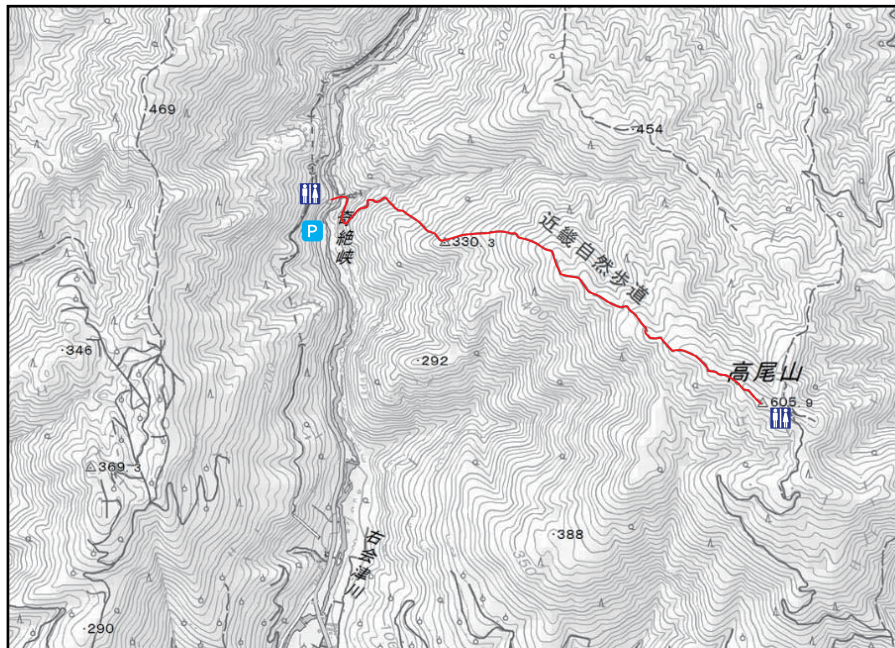
- (1) 稲成町のふるさと自然公園センターから龍神山への農道を登り、終点から徒歩で尾根づたいに龍神山の山頂へ
- (2) 上秋津のさこだに左向谷の農道を車で登り、終点から登山道で谷を西側に詰めて龍神山の山頂へ
- (3) 同じ左向谷の終点から谷を東側に詰めて、岩尾根を登って三星山の山頂へ



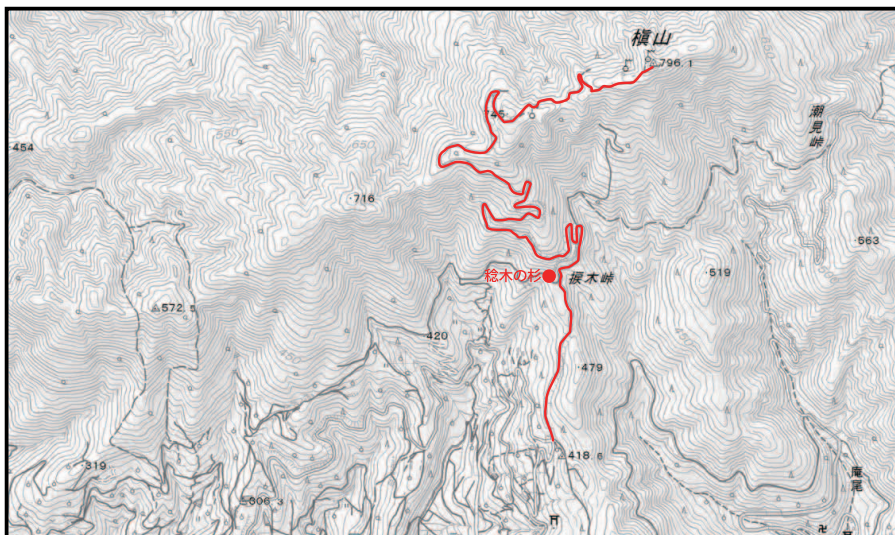




(4) 奇絶峡から不動の滝の上に出て、尾根を登って高尾山の山頂へ



(5) 上野から(株)NTTドコモ横山無線中継所管理道を歩いて横山の山頂まで



以上が一般的なものです。

高尾山へは山頂近くまで車で登れますから、山頂付近で時間をかけてバードウォッチングするのも、また楽しい試みだと思います。崖地ではハヤブサの子育てが見られます。

哺乳類では、この地域には和歌山県下で知られているものの大部分がすんでいます。ニホンザル、ニホンカモシカ、ホンシュウジカ、イノシシなどの大形の哺乳類をはじめ、キツネ、タヌキ、アナグマ、テン、ニホンイタチ、ムササビなど中形の哺乳類もいます。この中で、ニホンカモシカは特別天然記念物として保護されています。また、ニホンイタチは山間部に生息していますが、海岸線から市街地や農耕地の一带は、帰化したチョウセンイタチが多くなってきました。



ニホンイタチ



チョウセンイタチ



シカの糞



タヌキの糞



ムササビ



## 4 源流域の生きもの

### ① 植物

左会津川水系は、龍神山や高尾山の山すそを流れ下っていきます。その上流側では、流れは急ではないのですが、和歌山県の山間を流れる他の河川と同じような様相を呈しています。たとえば、流域の水田の畦にゼンマイやサツキが密生していたり、落葉樹のコクサギやアブラチャン、常緑樹のタラヨウやシラカシのような紀北の山間部に多い木が目立つようになります。今では見られませんが、昭和の中頃まではウメバチソウやトモエソウの美しい花が点々と咲いていたということです。山林の大部分はウバメガシ萌芽林やシイ、カシ萌芽林とスギ、ヒノキの植林で、あまり深い自然林ではないのですが、朝夕霧のかかる冷涼な気候につつまれて、海岸部とは一味違った地域だと考えられます。

早春から水田の畦にハルリンドウが美しい花をつけ、セリバオウレンが小さくて可憐な花をつけます。新芽とともに開花するクロモジやコナラ、ウバメガシなどは、じっくり観察すると微妙な美しさがあり、たくさんの昆虫たちを集めています。

初夏からは道端の乾燥地にオカトラノオ、湿地にヌマトラノオ、秋にはリンドウ、アケボノソウ、



源流域



サツキ



ハルリンドウ



ヌマトラノオ

アサマリンドウ、オオルリソウ、シモバシラ、アキ  
チョウジ、ヒキオコシなどいろいろ見られます。

葉のまん中に花が咲くハナイカダという低木  
があります。花は緑色で目立ちませんが、実が  
熟すると黒くなり、それが葉の上に一つ乗っかっ  
ているようすは、ちょっと奇妙な感じがします。

この地域には腐生植物も多く見つかっていま  
す。腐生植物とは、根に菌類が共生して、それ  
から栄養をもらって生活している植物のことで  
す。そのため、緑の葉もなく、茎と花だけの奇  
妙な形をしています。南方熊楠も強い関心を持っ  
ていたらしく、彼が中心になって詳しく調べてい  
ます。大形でアケビのような実をつけるツチアケ  
ビ、森林の落ち葉の中から真っ白の花をのぞかせる  
ギンリョウソウ、ギンリョウソウモドキ、それ  
らによく似ているがいくつもの花をつけるシャク  
ジョウソウ、針金のような細くて小さな花をつけ  
るホンゴウソウ、硬くて黒い茎に花だけつける  
ムヨウラン類、<sup>あんかつしよく</sup>暗褐色の花を落ち葉のすき間に咲  
かせるヤツシロラン類、<sup>りんえん</sup>林縁や果樹園の腐葉土か  
ら突然純白の<sup>くき</sup>茎を群生させるタシロランなど。

その他に、クモランという葉が退化して一見  
根だけの植物になったの  
もあります。根に葉緑体  
を持っているので生きて  
いけるのです。



アケボノソウ



ツチアケビ (花)



ツチアケビ (実)



ギンリョウソウ



ホンゴウソウ



クモラン



## ② 動物

哺乳類では山間部に見られるほとんどのものが人家周辺の低地にも出没する上、農作物への加害も少なくありません。昔はイノシシやノウサギ、ネズミなどが農作物に被害を与えていましたが、最近ではニホンザル、ホンシュウジカ、時にはニホンカモシカも加わっているということです。小型哺乳類では、リス、アズマモグラ、ヒミズ、ジネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、それにユビナガコウモリ、モモジロコウモリ、コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、アブラコウモリなどのコウモリ類が生息しています。

野鳥では森林にすむものに出会える場所がいくつもあります。林内にカシ類が多い関係からか、特にカケスが多く、冬にはオンドリの群れが谷川の淵に飛来します。照葉樹林は鳥の冬越しに適した環境でもあるのです。春から夏の期間は、サンコウチョウ、アオバト、ウグイス、ヤブサメ、メジロ、ヤマガラ、コガラ、ヒガラ、エナガ、オオルリ、ミソサザイなどが巣をつくり、秋から春にかけては、シロハラやツグミ、ジョウビタキ、ルリビタキ等のヒタキの仲間やウソ、クロジ、アオジなどの冬越しの場になります。

探鳥コースとしては、秋津川のおおぞうの大沢の上流部で県道からそれて、支流に沿って入ると、どこでも格好の観察地です。林道を歩いて山草を楽しみながら野鳥の声を聞くのもいいし、林道の片隅に



ノウサギの糞



ヒミズ



コウモリ的一种



メジロ (巣)



シロハラ

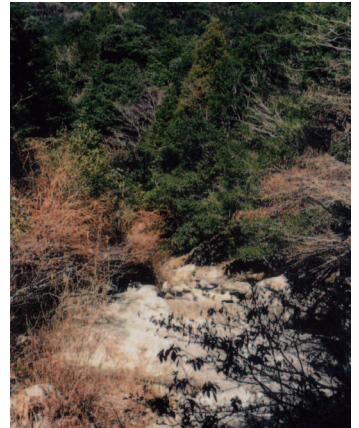
座って、野鳥の声につつまれながら、リスやノウサギ、トンボやチョウなどが飛び交うのを待つのも、それはまた格別に楽しいものです。

右会津川の支流である谷川や池の川でも、かなり多くの鳥に出会えます。市道や林道が整備されているので、子供連れのハイキングや昆虫採集をかねての探鳥コースとしておすすめできます。

また、左会津川の上流部の伏菟野<sup>ふと</sup>や熊野川付近もよい観察地です。山地性の動植物に加えて、暖地性のめずらしいものも見られます。この地域の方が車道が整備されていないこともあり、林道を歩いて昆虫や草花を観察するのに適しているといえます。熊野川の道端にはカゴノキの巨木が一本あります。太さ（胸高直径）約1 m、おそらく和歌山県下では最大の木でしょう。



ルリビタキ



源流域

## 5 ひき岩群と奇絶峡の動植物

### ① ひき岩群

田辺の市街地から、北にほぼ5 kmほど離れた稲成町の丘陵地に、奇怪な形の岩山が並んでいるのがひき岩群です。この岩山は100 m程の標高ですが、それぞれ北側の斜面が垂直に近い絶壁になっています。稲成川中程の屈曲している地点にそびえている岩山の一つが、和歌山県指定の名勝天然記念物「ひき岩」です。



ひき岩群

明治37年(1904)、南方熊楠が田辺に定住してから、よくこのひき岩群などを訪れて、植物や菌類の観察や採集に明け暮れていました。彼の残した標本の中には、当時の稲成村産の植物標本がたくさん残っています。「手頃な採集地だし、いいものが見つかるし」といって、熱心に通っていたということです。

このひき岩群で見られる熊楠自慢の植物の主なものを次に紹介します。

**ヒカゲツツジ**：黄色の花をつける山地性のツツジです。(写真は16ページを参照)

**イブキシモツケ**：県下でも珍しいバラ科の低木です。春に咲きます。

**バイカオウレン**：霧のかかるところに群生するキンポウゲ科の草花です。

**キキョウラン**：乾燥地を好む熱帯系のユリ科の草です。



イブキシモツケ

**キイジョウロウホトトギス**：紀伊半島の特産種で湿った岩壁に着生するユリ科の植物です。

**タカノハウラボシ**：霧のかかる深い山で岩や樹幹に着生するシダ植物です。

**マツバラシ**：もっとも原始的なシダ植物です。

**キクシノブ**：熱帯系のシダ植物です。

**サイゴクホンダウシダ**：熱帯系のシダ植物です。

**モウセンゴケ・コモウセンゴケ**：岩場に生える食虫植物です。コモウセンゴケの方が乾燥に強く広い範囲に見られます。モウセンゴケは、6から8月に白い花を、コモウセンゴケはピンク色の可憐な花を咲かせます。



キイジョウロウホトトギス



キクシノブ



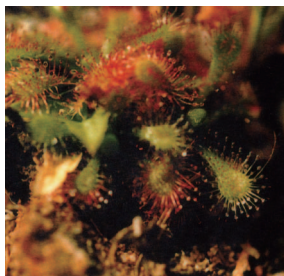
サイゴクホンダウシダ



マツバラシ



モウセンゴケ



コモウセンゴケ



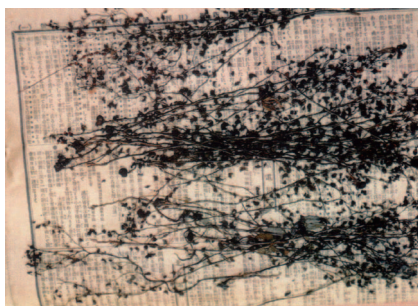
コモウセンゴケ (花)



以前から知られていた食虫植物のイシモチソウ、ホザキノミミカキグサ、タヌキモやヒナラン、スジヒトツバなどは最近では見つかりません。

ひき岩群の谷間で、わずかに標高50m前後の岩かげに、このようにたくさんの植物が生育していたことは、たいへん珍しいことです。熊楠の当時はもっと多かったということです。熊楠が愛着し自慢していた気持ちはよくわかります。ひき岩群一帯は乾燥した岩山のように見えますが、その谷間には岩壁がいたる所があり、湿地や滝のような所もあります。このような複雑な環境のため、多くの貴重な植物が他の植物に滅ぼされることもなく、また、人間の採取からも逃れて生きのびてきたものと考えられます。

ひき岩群のこの裸の岩山は、一体どうして出来たのでしょうか。ひき岩群の母岩は、新生代新第三紀の分厚い単斜構造の堆積岩層です。それがいくつかの小さな断層によって区切られた後、河川の浸食を受けて深い峡谷が形成されました。しかし、



イシモチソウ（南方熊楠の標本）



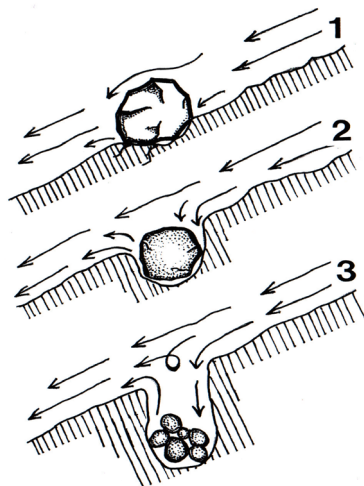
ひき岩の岩壁



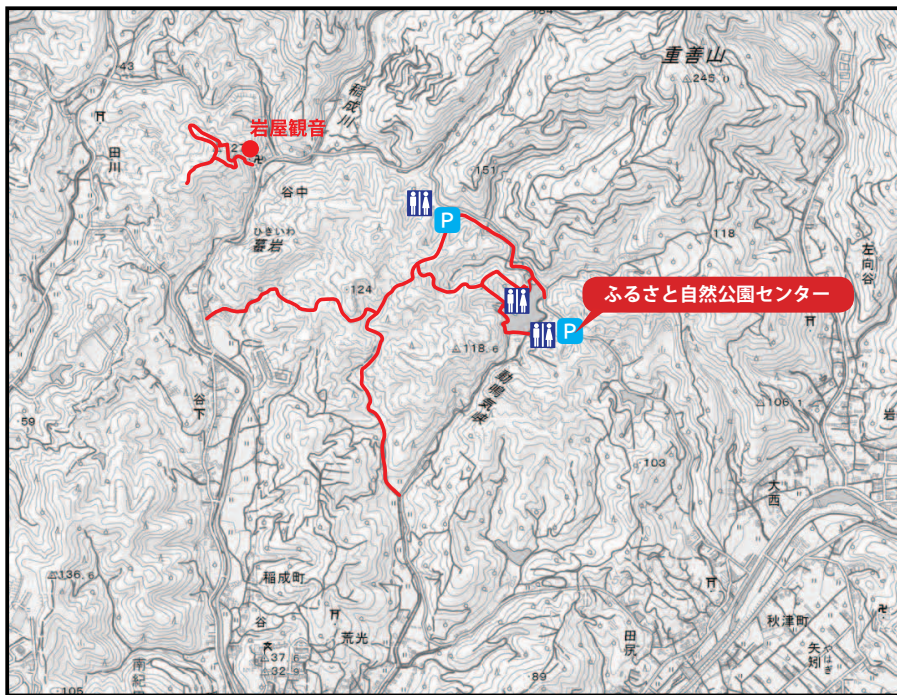
動鳴気峡

古い時代には、この峡谷は水量も豊富であつたらしく、<sup>どうめ ききょう</sup>動鳴気峡には直径4～6m、深さ3～5mの巨大な<sup>おうけつ</sup>甌穴が残っています。甌穴とは岩石が水流で回転して造った川底の穴です。

このように水量が豊かであったのは、本来この岩山一帯には深い森があつたからです。江戸時代から新庄付近で大規模な製塩事業が始まり、<sup>まき</sup>新にするため里山がほとんど裸になりました。ひき岩群の場合、この急峻な地形のため表土が流失し、今の地形になったと考えられます。



甌穴の発達



ひき岩群の自然観察路

おそらく、昔のひき岩群は、ヒノキ、ネズ、クロマツなどとスダジイやウバメガシ、タイミンタチバナなどがまざった森でおおわれていたと推察されます。

岩山の乾燥化が進んだ現在でも、その周辺にはカスミサンショウウオやアカハライモリが生息し、多くの貴重な昆虫類が確認されています。



カスミサンショウウオ



カスミサンショウウオの卵のう



カスミサンショウウオの幼生



## ② 奇絶峡

右会津川が三星山と高尾山との間を流れる地点に奇絶峡があります。県道の対岸に立派な滝があり、そばの岩壁には仏像の彫刻もあり、巨岩が点在した川に沿ってサクラやカエデも植樹されて、有名な観光地として、市民の憩いの場になっています。

奇絶峡の見どころは、峡谷をはさんで迫ってくる絶壁と、それをおおう照葉樹林です。ウバメガシを中心にウラジロガシ、タイミンタチバナ、サカキ、タブノキ、モチノキ、カナメモチなどの常緑樹が濃い緑の葉を広げ、カギカズラ、オオツツラフジ、キイセンニンソウ、ジャケツイバラなどのつる植物が、樹上に広がって伸びているようすは、北の地方ではまったく見ることのできない南国的な景観です。

この岩場にはひき岩群で見られる植物と共通したものもかなり多いのですが、シダ植物やコケ植物ははるかに豊富です。アツイタ、ホウビシダ、ツルデンダ、イワヤナギシダ、ヤノネシダなど多くのシダ植物をはじめ、クマノゴケ、エビゴケなどのコケ植物、カギカズラ、サカキカズラ、シタキソウ、



奇絶峡



ジャケツイバラ



ツルデンダ



フウトウカズラなどのつる植物や、谷間の下草の中のシモバシラ、サイコクトキワヤブハギ、クサヤツデ、奇絶峡入り口の林縁に大群落を作っているタイキングク、森林の構成樹になっているカンコノキ、カンザブロウノキ、トキワガキ、ミミズバイなど、実に多種多様です。

溪谷にそって道路があり、絶えず車が走っているため、大形の動物はあまり姿を見せませんが、それでもテンやニホンイタチ、アナグマなどは、ときどき人の目につくことがあり、夜間はコウモリが群れているのを見かけます。

おそらく山地性のモモジロコウモリではないかといわれています。

野鳥ではオオルリが毎年春にきて巣をつくります。岩壁のくぼみにコケ植物を分厚く積み重ねて立派な巣をつくる鳥で、姿はきれいで、ウグイスに<sup>ひってき</sup>匹敵する美声の持ち主です。



アツイタ



フウトウカズラ

## 6 田辺を特色づける生きもの

### ① 植物

**マツバラシ**：最も原始的なシダ植物の一種です。和歌山県では田辺市より北ではきわめて少なくなっています。田辺地方は江戸時代からの名産地で、いくつもの古典園芸の品種も産出しています。採取と環境変化のため近年激減しました。



マツバラシ

**キクシノブ**：シノブに似たシダで、やや小型、葉は常緑で肉厚く硬いのが特徴です。暖地性の植物で数が少なく、岩壁に小さな群落をつくります。南方熊楠が大切にしていたものです。



キクシノブ

**ツルデンダ**：山地の湿った岩壁に着生するシダです。奇絶峡の道路沿いの岩壁に今も小さな群落があります。(写真は39ページを参照)



オリヅルシダ

**オリヅルシダ**：一見オニヤブソテツに似ていますが、葉の先端が土にふれると根を出してふえます。和歌山県下の産地は田辺と大島だけで、高尾山に自生地があります。



シンテンウラボシ  
(ヒトツバイワヒトデ)

**シンテンウラボシ**：ヤリノホクリハランとイワヒトデ類との自然交配種といわれている珍しい植物です。中芳養に北限の大群落があり、田辺市が天然記念物

に指定しています。

**ヒメコマツ**：“五葉松”として知られる木です。県下では主要な山間部の岩尾根に生育していますが、かつては三星山一带に生えていたものらしく、現在も山頂部にわずかに生育しています。

**食虫植物**：田辺から白浜にかけての一带は、和歌山県下最大の多産地でした。モウセンゴケ、コモウセンゴケ、イシモチソウ、ホザキノミミカキグサが、主として日当たりのよい水湿地や湿った裸岩に生え、タヌキモ類は水中生活です。最近ではコモウセンゴケ類以外はほとんど見られなくなっていました。（写真は35・36ページを参照）

**イチイガシ**：遺跡から出土するので、昔は丘陵地や山すそに森林をつくっていたと考えられますが、現在の田辺では中芳養の八幡神社に大木が残っています。



イチイガシ

**ミスミソウ**：寒冷地の森林に生える常緑の草です。和歌山県下では、高野山周辺からわずかに記録があるだけの少ない種で、早春に可憐な花をつけます。花色は白色から紺、淡い紅、紫までいろいろです。



ミスミソウ

**シマサルナシ**：別名ナシカズラ、キウイフルーツに似たつる植物です。紀南地方では海岸線に多いのですが、田辺では上秋津の左向谷や奇絶峡などの山間部に生えています。



シマサルナシ

**カキノハグサ**：葉はカキの葉に似て大きく、初夏に黄色の花を数個つけます。和歌山県下では、紀北の山地に多く見られる植物で、田辺市では槇山の中腹などに生えています。昭和初期に秋津川から変種としてナガバカキノハグサが記録されました。



カキノハグサ

**ナンキンナナカマド**：山地から亜高山の植物として有名なナナカマドの仲間です。初夏に白い花をつけ秋には赤い実をつけます。紀南では海岸近くにも生育し、田辺市では新庄や天神崎にも生えています。



ナンキンナナカマド

**キセンニンソウ**：センニンソウに似ていますが、葉は厚くて革質、葉柄かくしつに節ようへいがあるという特徴をもっています。紀伊半島以南に分布し、和歌山県下では日高郡以南に見られ、田辺では山間部に多産します。(写真は 18 ページを参照)

**ハカマカズラ**：亜熱帯に分布するつる植物です。別名をワンジュ（彎珠）といい、古くからその種子を数珠じゆずの材料にしてきました。田辺湾の神島はこれが多数生育していることで、全国に知られています。市内の各地にも植栽されています。先に切れ込みのあるその葉の形をはかま（袴）に見立ててこの名がついています。



ハカマカズラ（幹）



ハカマカズラ（葉と花）



ハカマカズラ（実）



**アサマリンドウ**：リンドウとちがって、葉が厚く緑が濃い上につやがあります。紀伊半島と四国だけに分布する植物です。名前の「アサマ」は、伊勢の朝熊山<sup>あさま</sup>に由来するものです。朝夕霧のかかる環境に生えるのですが、紀南地方では新庄のような海岸近いところでもたくさん見られます。



アサマリンドウ

**カギカズラ**：暖地性の大形のつる植物です。葉腋に大きく曲がったカギがあり、このカギをまわりの樹木にひっかけて這い上がります。植林地によくはえ太くなるので、木をいためるといって嫌われることもあります。葉にはこの植物独特の光沢<sup>こうたく</sup>があります。紀南地方では普通種ですが、全国的にはたいへん少ない植物です。



カギカズラ

**タイキンギク**：きわめて大形の野菊です。背が高く伸びて2 m以上にもなり、晩秋から初冬にかけて黄色の小花を咲かせます。亜熱帯に分布し、紀伊半島では海岸線に点々と生育しています。



タイキンギク

**キジョウロウホトトギス**：湿った岩壁から垂れ下って生育する植物で、紀伊半島の特産種です。紀南地方に広く分布しているのですが、秋に黄色の美花をつけるので有名となり、各地で採取



キジョウロウホトトギス

されて少なくなっていました。

**ギボウシの一種**：崖から垂れ下って群落をつくるギボウシが、ひき岩群や龍神山でよく見られます。ヒュウガギボウシの一種とみなされていますが、今のところはっきりわかっていません。

**ハルザキヤツシロラン**：深い照葉樹林に生える腐生植物です。5月～6月に咲く褐色の花は高さが数cmしかなく、落ち葉のすき間からわずかに花をのぞかせる程度です。結実後は30cmあまりにも伸びるので、見つかるのはこの時期です。南方熊楠が研究したきわめて不思議な植物です。秋に開花する別種アキザキヤツシロラン、クロヤツシロランもあります。

**タシロラン**：全体が白色の腐生植物で、たくさんの花を茎につけます。最近になってあちこちの林縁や果樹園で多量に発生しているのが見つかりました。

**ミスミイ**：古くから少ない植物だったようで、南方熊楠の時代に新庄付近で発見されて有名になりました。その後なくなっただけ今も生き残っていることがわかりました。カヤツリグサの仲間、細い緑色の棒状の草です。同じ仲間によく



ハルザキヤツシロラン



クロヤツシロラン



タシロラン

似たものがいくつかあって区別するのは難しいものです。

**キノクニスゲ**：西南日本の深い照葉樹林の樹下に生える大形のカヤツリグサの仲間で、暖地にしか見られないきわめて少ない植物です。田辺市では神島に大群落があり、和歌山県下では他には由良町<sup>えな</sup>衣奈の黒島、南部<sup>かしま</sup>の鹿島、串本の大島、古座<sup>くろしま</sup>の九龍島に生えているだけです。こんなに珍しい植物ですが、生えている状態は“ただの草”にしか見えません。



キノクニスゲ



キキョウラン

**キキョウラン**：ランの葉に似た暖地性のユリ科の植物です。和歌山県下では海岸線に沿って点々と生えていて、田辺ではやや内陸側の岩上に生えています。



ヒメコウホネ

**ヒメコウホネ**：全国的に少ないといわれている水草です。田辺にはまだ数ヶ所の自生地がありますが、埋立てや水の汚濁<sup>おたく</sup>で減少しつつあるのが現状です。



ミヤマトベラ

**ミヤマトベラ**：海岸にたくさん生えているトベラと違って、山間の照葉樹林に生えるマメ科の植物です。

**ハマボウ**：海岸の湿地に生えるハイビスカスの仲間の樹木で、夏に大きい黄色の花をつけます。日高川河口に大群落があり、昔は田辺湾の南岸に多く自生



ハマボウ

していましたが、海岸線の埋立てによって、現在はほとんどなくなりました。新庄町の内之浦干潟親水公園には植栽されたものが見られません。

**ムラサキセンブリ**：日当たりのよい草地に生える目立たない草です。近年各地で激減した植物ですが、新庄付近を中心にわずかに生き残っています。大切に保全したいものです。



ムラサキセンブリ

**キジョラン**：暖地性の大型のつる植物で、広くてつやのあるハート形の葉をつけます。和歌山県北部ではきわめて少ないのですが、紀南地方では数は少ないものの、かなり広い範囲に生育しています。



キジョラン

**シバナ**：海水の入る川口（汽水域）や沼地（塩沼地）に生える植物で、海水に浸っても生きていけるように、葉は特に細長くて分厚くなっています。南方熊楠は、この植物に特に強い関心を持っていたらしく、たくさんの標本を残しています。



シバナ

おそらく、そのころには県下一円の海岸に点々と自生地があったようです。ところが、海岸線の護岸工事と入り江や塩沼地の埋立てなどで、ほとんど絶滅したような状態になりました。ところが新庄付近で細々とわずかに生き残っていて、最近になって写真のような群落に回復しています。



## ② 昆虫〔特に注目される昆虫〕

**クチキコオロギ**：亜熱帯以南に分布する大形のクオロギです。体は大きく触角がきわめて長く、ハネが短いのが特徴です。そのため、腹部の半分以上が<sup>はね</sup>翅におおわれていません。台湾エンマクオロギも芳養海岸から知られており、この地域が北限だと考えられています。幼虫で冬を越し、初夏成虫になります。



クチキコオロギ



ムカシトンボ（幼虫）

**ムカシトンボ**：日本とヒマラヤ地方にだけ生きている生きている化石と呼ばれるトンボです。成虫は春に発生しますが、幼虫は冷たい清流で6～7年間も水中生活をするため、川が不安定になると生活できません。そのため、全国的に少なくなり、環境省はすぐれた環境を判断する昆虫（指標昆虫）に指定しています。紀南地方では、山地溪流に生息します。成虫の飛び方はたいへんすばやいです。



ムカシトンボ

**ムカシヤンマ**：ムカシトンボと同様に珍しく、生きている化石といわれています。幼虫は滝や湿岩に生えたコケ植物の中などで生活しています。成虫は初夏に発生し、日当たりのよい谷間の岩などによくとまります。

**台湾ウチワヤンマ**：熱帯系のトンボで、最近北の方に分布が広がっています。腹部の先端にウチワ状のひらひらがあるのが特徴です。



台湾ウチワヤンマ

**ヨツボシトンボ**：中形のトンボで、体が茶褐色で前後翅に黒褐色の斑紋ぜんこうしほんもんがあります。北日本に多く、南日本では生息地が限られているといわれています。浅い池沼で初夏に発生します。



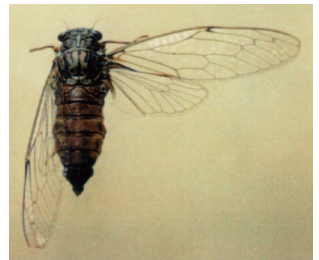
ヨツボシトンボ

**ヒメアカネ**：アカネの仲間は全般に小型ですが、本種は特に小さいトンボです。寒冷地に分布し北日本に多いのですが、田辺や白浜付近には多くの生息地があります。



ハルゼミ

**ハルゼミ**：アカマツ林の減少のため近年全国的に激減した里山の代表的な昆虫です。マツゼミともよばれ、4月から5月にかけて出現する小形のセミです。紀南地方では浅いシイ・カシ萌芽林やウバメガシ萌芽林にも生息しています。



ヒメハルゼミ

**ヒメハルゼミ**：照葉樹林の珍しいセミとして全国的に有名ですが、山間部で初夏に大発生します。

**ゲンジボタル**：5月～6月に発生する溪流性のホタル。かつては、全国的に広く分布し、各地で多数見られましたが、農薬汚染のため激減し、和歌山県下でも多くの地域で見られなくなりました。紀南地方では、今でも見ることができます。やや小型のヘイケボタルは、水田や溝から発生し、ヒメボタルは陸生で森の中で発生します。それぞれ光の色合いや光り方が少しずつ違います。



ゲンジボタル (幼虫)

**ルリセンチコガネ**：全国的に広く分布するオオセンチコガネは地域によって変異があり、紀伊半島のものは全身瑠璃（るり）色で、緑色の金属光沢があり、ルリセンチコガネと呼ばれます。大形哺乳類の糞<sup>ふん</sup>を食べるため、シカなどの生息範囲で見られます。同属のセンチコガネは少し小さくて、体色は黒くて光沢があります。このように、動物の糞を食べる虫を“糞虫”<sup>ふんちゅう</sup>と呼びます。



ルリセンチコガネ

**ゴホンダイコクコガネ**：前種と同じく“糞虫”<sup>ふんちゅう</sup>で、オスに5本の鋭い角があります。一般に山地性の昆虫ですが、紀北地方に少なく紀南地方に多い傾向があります。



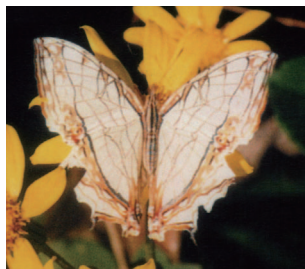
ゴホンダイコクコガネ

**オキナワコアオハナムグリ**：亜熱帯系の小形コガネムシです。日本本土ではたいへん少なく、紀伊半島の南部海岸線が北限です。コアオハナムグリに混じっていますが、前翅の斑紋が小さいこと、腹部が銅色をしていることなどで区別<sup>ぶんべつ</sup>します。



オキナワコアオハナムグリ

**イシガケチョウ**：熱帯系のチョウです。紀南地方には多産し、山間部の溪流沿いでたくさん発生しますが、市街地でも少なくありません。幼虫は木陰や水辺のイヌビワやイタビカズラの葉を食べ、4月始めから観察できます。幼虫には頭と背に4本の角があり、形も模様も特異です。同じ熱帯系のチョウにスミナガシがあります。暖地性のヤマ



イシガケチョウ

ビワを食餌植物として発生します。幼虫にはやはり角があります。

**ヤクシマルリシジミ**：紀伊半島を北限とする亜熱帯以南に分布する小さなチョウです。和歌山県下では海岸線に沿って紀北地方まで知られ、紀南地方ではやや普通に見られます。サツマシジミも亜熱帯以南に分布するチョウで、青地のハネに青白色の模様が特徴です。春から発生しますが、秋に増加する傾向があります。

**ハマオモトヨトウ**：ハマオモト（ハマユウ）は海岸に自生していますが、人家の庭にも多く植栽されています。これを毎年のように食い荒らすイモムシが本種です。別にアカマダラヨトウというガもあり、稀に大発生してハマオモトを食い荒らします。ともに紀伊半島を北限とする熱帯系のガです。

**モンシロモドキ**：モンシロチョウによく似た昼間に飛ぶガで、東南アジアに広く分布しています。30年ほど前は、和歌山県下ではほとんど記録がありませんでしたが、最近をよく見つかるようになり、幼虫も発見されています。

**オキナワルリチラシ**：全国的に数が少なく、とても美しいガとして有名ですが、紀伊半島ではそれほど少ないものではなく、山間部では、夏から秋にかけて毎年見つかって



サツマシジミ



ハマオモトヨトウ



ハマオモトヨトウ（幼虫）



モンシロモドキ



オキナワルリチラシ



います。豊かな自然林の残っている地域に  
すみ、幼虫はツバキ類の葉を食べます。

**サツマニシキ**：美しいガで、幼虫はヤマモガ  
シの葉を食べ、年に2回（6月・10月）  
発生します。これらのガは昼間も活動しま  
すが、夜間に灯火へも飛んで来ます。つか  
むと背中から淡褐色の泡を出します。有害  
ですから触ったら必ず手を洗うことが大切  
です。



サツマニシキ



サツマニシキ（幼虫）

**クロシオキシタバ**：比較的近年知られた大  
形のガで全国的に少ないものとされていま  
す。しかし、このガの幼虫はウバメガシの  
葉を食べるため、和歌山県下には発生地は  
多く、農薬の影響が少ない山間部の尾根や  
海岸のウバメガシ林から、毎年たくさん発  
生しています。同じ仲間のウスイロキシタ  
バ、アミメキシタバ、コガタキシタバなど  
の種類も知られています。



クロシオキシタバ



ウスイロキシタバ

**ツマアカベッコウバチ**：クモや昆虫を捕らえ  
て巣に引込み幼虫の餌にする“狩り蜂”で  
す。“狩り蜂”には多くの種類がありますが、  
体が大きくて腹部の先端が赤いので、  
すぐにわかります。熱帯系のハチで、和歌  
山県下の海岸部から知られ、人家周辺にす  
みつき、大きいクモを毒針で麻痺させて引  
きずっているのがよく観察されます。



ツマアカベッコウバチ

## 7 外来動物

本来生息していない所へ人間が持ちこんだり、荷物などにまぎれて侵入し、そこにすみつき繁殖を重ねている生物を移入種と呼びます。なかでも、外国からやってきたものを外来種と言います。身近なところにも、そうした外来動物が見られるようになってきました。外来動物は農作物への食害だけでなく、在来種にとって捕食やすみかの競合によって大きな脅威となり、さらには、寄生虫や感染症を持ちこむ場合もあります。

**アライグマ**：北米原産で成獣は5～10kg、タヌキより一回り大きな動物です。人間やサルと同じく5本指を器用に使い、物をつかんだり、握ったりできます。夜行性なので、日中に姿を見ることは稀ですが、特徴的な手足の痕跡からアライグマの生息が確認できます。田辺市では農作物への食害が増えており、2002年から捕獲をしています。



アライグマ

**ハクビシン**：東南アジア・台湾原産で成獣は4～5kg、からだは細長く40cmを超える長い尾が特徴です。日本国内には江戸時代に持ち込まれていたようです。樹上生活に適応しており、電線や雨樋さえも移動に利用します。県南部では2014年に白浜町内で初めて見つかри、田辺でも既に30頭以上確認されています。今後、生息数の増加、分布の拡大が心配されています。



ハクビシン

**ミシシippアカミミガメ**：北米原産で、頭部の側面にある赤い模様が特徴のカメです。ミドリガメの名前でペット用に販売されていました。全国的に野生化しており、その影響でイシガメやクサガメが激減しています。田辺でも川や池などで見かけるカメの大半は、このアカミミガメになってしまいました。



ミシシippアカミミガメ

**アフリカツメガエル**：名前のおお指先に爪のあるカエルで、ほとんど水中で過ごし、陸に上がることは稀です。

このカエルは、2007年に新庄町鳥ノ巣のため池で初めて見つかりました。鳥ノ巣では、いくつものため池で生息が確認されていますが、鳥ノ巣以外の場所ではまだ見つかっていません。ため池の水を抜いてこのカエルの駆除を試みたところ、本来いるはずのエビやカニ、水生昆虫が極めて乏しく、アフリカツメガエルがため池の在来種を食べ尽くしているようでした。



アフリカツメガエル

自然は長い年月を経て形成された生き物のつながりやバランスで成り立っています。外来生物は、そうしたつながりを持たず、バランスを壊してしまいます。長い歴史を共有している在来種が暮らす自然を守ったり、回復するには、外来生物を排除することが人間の大きな役目となっています。



## 8 多様な生きものの世界

ねんきん

粘菌（変形菌）：南方熊楠が特に関心を持って調査研究をしました。

菌類：カビ、キノコの仲間。セミの幼虫に寄生する冬虫夏草も菌類の仲間です。



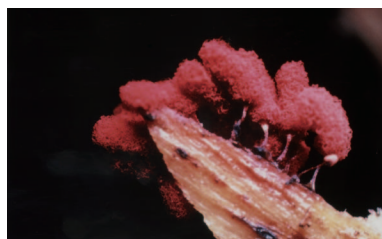
ムラサキホコリ（粘菌）



クモノスホコリ（粘菌）



ツノホコリ（粘菌）



ウツボホコリ（粘菌）



粘菌を食べるコベソマイマイ



セミタケ

ちいさい  
地衣類：菌類と藻類の共生した生物。

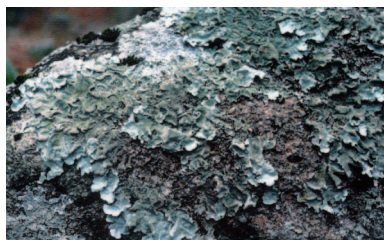
土壌動物：落ち葉や朽木を分解して土をつくる動物群（カニムシはその捕食者）。



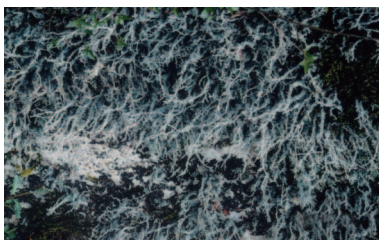
アミガサタケ



クサウラベニタケ



ウメノキゴケ (地衣類)



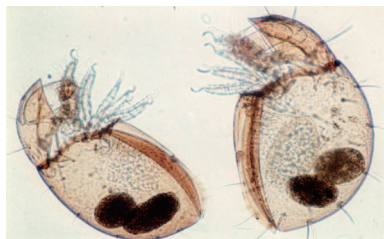
ハナゴケ (地衣類)



マミズクラゲ



カニムシの一種 (土壌動物)



ヒメヘソイレコダニ (土壌動物)



フトツツハラダニ (土壌動物)

## おわりに

このガイドブックでは、市内に残る自然環境を中心にして、田辺付近の特徴的な生物を紹介しました。

豊かだったここ南紀州の自然も、昔の姿の面影さえないところも多いのですが、幸い、田辺にはまだかなりの自然が残されています。私たちはこの自然を大切にするとともに、自然とは何かということを知り、この地の自然の解明を続けていこうと考えています。それと同時に、身近にあった生き物たちを呼び戻し、消えた元の自然をよみがえらせたいたいです。

ひき岩のふるさと自然公園センターでは、田辺に残されたすぐれた自然である元島・天神崎・ひき岩群・奇絶峡・左会津川・山間部の山々などを中心に、その自然のようすや特徴がわかるようにして、標本や写真・図などにより解説しています。また、自然に触れようという皆さんの気持ちを大切に、皆さんの力にもなりたいと思っています。いつでも気軽に来てください。

しかし、何よりも大切なことは、皆さんの家の近くの野山や川、それに海辺などで、そこに生活する生き物たちに目を向けてほしいのです。そして、その生き物たちの生きる姿を知り、そこから生命や自然のことを考えて欲しいのです。

子供たちの成長にとって大切なことは、直接自然に触れ、そこで遊び、その不思議さに驚き感動し、発見をしていくことなのです。そういう体験を通じて、学ぶ力や考える力が身につく、自分すなわち人間を含めて自然をよく知ることにつながるのです。

私たち大人もまた、子供たちと共にこの自然を楽しみながら、そのしくみを知ると共に、田辺のよさを改めて見つけていきたいと思っています。そして、自然に溶け込んだ日本の文化を大切に、それを後世にも伝えていこうではありませんか。



## ひき岩群国民休養地 ふるさと自然公園センター

### 国民休養地とは

自然とのふれあいが少ない都市やその近郊の人々に、ハイキングやピクニックなど単なる一時的なレクリエーション活動の場を提供するだけでなく、そこに生きる動植物等との「ふれあい体験」を通して、自然と人間との調和のあり方、また自然の保護育成に関して考える機会をつくるための場所になることを目的としています。

### ふるさと自然公園センター

ひき岩群国民休養地の中心となる施設で、ひき岩群の自然のほかに、田辺の自然や仕組みを写真、パネル、標本などでわかりやすく紹介しています。また、専門知識の豊富な観察指導員が、生きもののことや自然観察についての質問にお答えします。

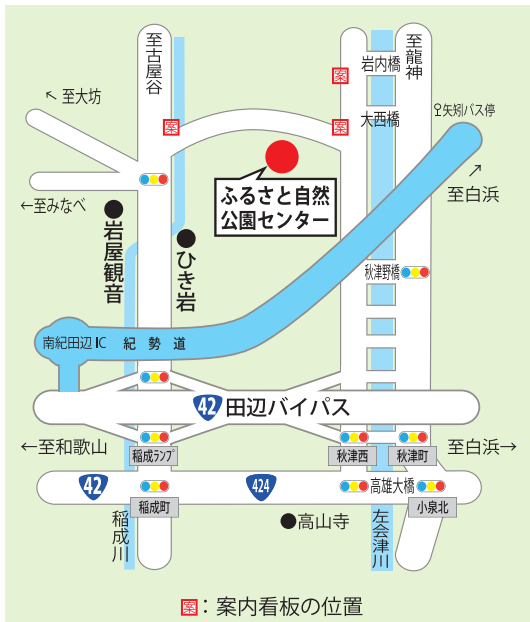
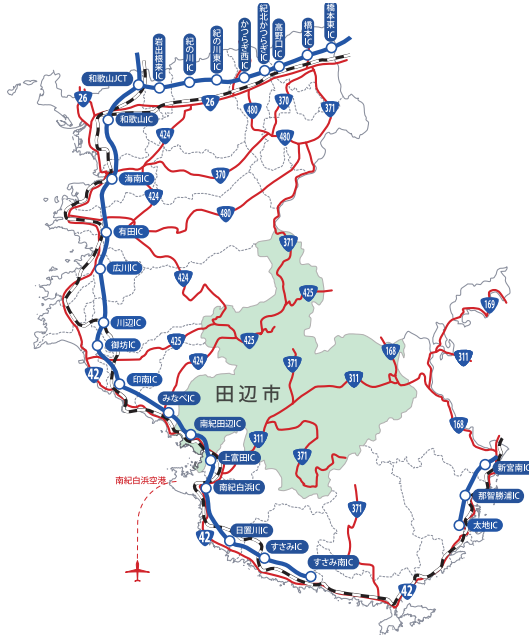
〒 646-0051 和歌山県田辺市稲成町 1629 番地

TEL/FAX 0739-25-7252

- 1 開館時間 AM10:00 から PM4:00
- 2 休館日 毎週月曜日（休館日が祝日の場合はその翌日）  
年末年始（12月28日から1月4日）
- 3 入館料 無料



## 交通のご案内



案内看板の位置

### ●電車を利用の場合

JR 紀勢本線「紀伊田辺駅」下車  
 龍神バス 龍神温泉行き  
 やはぎ  
 「矢矧バス停」下車徒歩 1.5km

### ●車を利用の場合

国道 42 号線から龍神方面  
 大西橋手前を左折 1.5km  
 または、  
 国道 42 号から稲成方面  
 岩屋観音を過ぎ右折 1.4km  
 ※大型観光バスは龍神方面から  
 お回りください。

## 自然観察の諸注意



- 生きものの自然な姿を観察しましょう。
- 植物を踏み荒らしたり、生きものの生息地をおびやかさないように、観察は静かに行いましょう。
- 海での観察では、時刻によって海の水位は変わるので、潮の干満の時刻を調べましょう。

## 安全な服装

- 肌を出さない。
- 日差し対策を十分に行う。

帽子、長袖のシャツ、長ズボン、長靴、運動靴などすべらないもの

## 持ち物

タオル、手袋、筆記用具、昼食（行動食）、雨具  
あればルーペ、双眼鏡、カメラ 等

田辺市の自然観察ガイドブック 平成 11 年 3 月発行

執筆・編集

代表	後 藤 伸	田辺市文化財審議会（委員長）
執筆・編集	玉 井 濟 夫	田辺市文化財審議会
執筆	津 村 真由美	日本野鳥の会和歌山県支部
執筆	土 永 浩 史	田辺市文化財審議会
執筆	後 藤 岳 志	和歌山県自然環境研究会
執筆	土 永 知 子	和歌山県自然環境研究会

協力・資料提供

乾風 登（御坊市）	小野新平（東京都）	玉田一晃（田辺市）
前田玄津二（美里町）	松下 弘（古座川町）	山本佳範（和歌山市）
弓場武夫（田辺市）		

田辺市の自然観察ガイドブック〔2017 年改訂版〕 平成 29 年 3 月発行

編 集	玉 井 濟 夫
	藤 五 和 久
	鈴 木 和 男
	津 村 真由美
	土 永 浩 史
	後 藤 岳 志
	土 永 知 子
	弓 場 武 夫

発 行 田 辺 市  
市民環境部 環境課  
〒 646-8545 和歌山県田辺市新屋敷町 1 番地  
TEL 0739-22-5300（代表）  
0739-26-9927（直通）



田辺市の自然観察ガイドブック〔2017年改訂版〕



ひき岩群